

私のスーパーウルトラお母さん

深堀

絢

「ねえ、あやちゃんのお母さんって今何才なの？」

「えっ……あつそういえば、もうすぐ行かなきゃ！じゃあね。」

私は、いつもお母さんは何才？と聞かれるとからかわれるのがこわくてにげていました。小さいころは、そんな事はなかったのに、今となつては六十才というお母さんの年が、私は、はずかしい事だとまぢがつていました。でも、6年生になつた今、私はやつとお母さんは年なんて関係なく私のために、いっしょけんめいがんばつてくれているんだと気付きました。

習い事の役員も、地域の仕事も、そして家の仕事もすべてやりとげる姿は、イキイキ20代と言つてもいいくらいのお母さんです。たまには、ショッピングモールやテーマパークへいっしょに行く若いお母さんもうらやましく思います。

でも、こんなにいっぱい物事知つていて、五、六十年前の話をしてくれるお母さんなんて、ほかにはなかないはず。

「そう考えると、お母さんは、スーパーウルトラお母さんなんだから！」

とお母さんは言います。

「そっか。スーパーウルトラお母さんに年なんて関係ないんだ！」その日から私は、六十才のお母さんは宝物になりました。そして、「ふつうとちがう」という事に自信を持ったのでした。それからある日、

「私のお母さんは三十二才！あやちゃんのお母さんは？」

その時は、もう昔の自分とはちがいました。にげずに、ちゃんと言えました。

「私のお母さんは、六十才だよ。」

「えーふつうのお母さんより年が……」

「そうなの。いいでしょ！本当は60才だけど20才みたいに元気なスーパーウルトラお母さんなの。」

「へえーすごいね！」

「うん！」

そのとき、思いました。

「お母さん、私のお母さんでいてくれてありがとう！スーパーウルトラお母さんでいてくれてありがとう。」